

あとがき

人文科学研究所長 木村 琢 也

『清泉女子大学人文科学研究所紀要』第四十一号をお届けする。

本号には論文十一編が収録されており、著者（共同論文については筆頭著者）の内訳は本学の専任教員七名（うち所員六名）、非常勤教員三名、客員所員一名である。

掲載論文はすべて査読をへている。応募論文十一編中、三編を「条件付き掲載可」、八編を「掲載可」とした。応募者に対しては、採否の結果をお知らせするとともに、査読者の所見をあわせて通知した。

前号の「あとがき」の中で、私は日本政府がおこなっている統計手法の不適切な操作やデータの改ざんを指して、オーウェルの「一九八四年」（一九四九年出版）のようだと非難した。それから一年が経ち、状況がますますオーウェルのようになっていく気がして、学生時代（現実の一九八四年前後）以来数十年ぶりにこの小説を読み返してみた。当時はどこか遠くのディストピアの物語に見えていたこの小説世界が、今度はいやにリアルに迫ってきて慄然とした。

もちろんオーウェルが創造した世界は、スターリンがソ連に構築した全体主義的監視社会の本質を抽出し、それを究極まで推し進めた先に出現するであろう虚構世界である。しかし、そこに描かれる統治手法——党の発表する「事実」に合わせて過去の記録を書き変える、数値を捏造して生活水準が向上しているように見せかける、など——はいま私たちが暮らしているこの日本で、

政府がせっせとおこなっていることそのもの、またはそれに極めて近いことではないか。私は去年ここに書いたことを繰り返さざるを得ない。「優れた文学者は見抜いているのだ。人間は何をするのか……」

さて、この文章を書いている二〇二〇年二月二十五日現在、私たちはいわゆる新型コロナウイルスの流行におびえている。この状況に身を置いて、私はまた一冊、昔の小説を手にとった。小松左京の『復活の日』（一九六四年出版）である。謎の病原体が蔓延し、わずか数か月の間に人間を含む脊椎動物のほとんどが死滅するという物語。読み返してみると、作者の知識の広範さに驚嘆するとともに、人間は個人で何をするのか、集団で何をするのかというテーマについての洞察の深さにも感銘を受ける。

読者がこの小説から受け取る教訓は多いが、今ここで私が強調したいのは、人類はその叡智を集めてひとつの方向に向ければ破滅的な困難をも克服できるはずだという作者の人間に対するオプティミズムが、絶望に満ちた物語の奥底に流れているということだ。特に専門知を持った人間は、それをこのちっぽけな天体の中で陣取り合戦に使う代わりに、それぞれの分野の知見を持ち寄って人類全体の向上に役立てるべきなのである。

ひるがえって今回のウィルスに対する行政の対応はどうだろう。厚生労働省のホームページを見ると、二月一日に「武漢市の滞在歴がない国内症例が発生している状況なので各自治体は医療体制を整えるように」という「事務連絡」が発出されている。病原体保有者が乗っていたと見られるクルーズ船が横浜に帰艦したのはその二日後の二月三日。しかし、国が専門家を招いて「新型コロナウイルス感染症対策専門家会議（第一回）」を開いたのは

二月一六日のことである。なぜもっと早くしなかったのか。専門家を入れるとややこしくなるとでも考えていたのだろうか。

私は外国語教師であって感染症のことは何もわからないが、来年から始まるという「大学入学共通テスト」（予定通りやるつもりなのか？）にまつわる迷走については言いたいことがある。結局は延期になった英語の外部検定試験によるスピーキング能力測定の件だ。英語教育学、第二言語習得論、テスト理論の専門家たちが何年も前から反対しているのを一顧だにせず、文部科学大臣のふとした失言から大学生や高校生までが反対するようになってついに頓挫するまで、あと一歩で強行されるところだった。なぜ専門家の意見を聞かないのだろうか。

英語と言えば、今年開催されるかもしれない東京オリンピック、パラリンピック（予定通りやるつもりなのか？）の会場にはCalm down, cool down という名前の部屋があるそうだが、なんでも障害を持つ人が気持ち落ち着けるための空間だそうだが、ドアの前に「落ちつけ、冷静になれ」と書いてあるのを見てそれを理解できる人がいるだろうか。これを契機にCalm down, cool down がその種の空間のことを意味する用語として普及定着する可能性もゼロではないとは言え、現状では誰のためにあるのかわからない表示と言わざるを得ない。なぜ専門家の、せめて英語母語話者の意見を聞かなかったのだろうか。

雑多なことを書き連ねたが、以上すべてに共通するのは、専門知の軽視である。文理を問わず、学問が軽視されているのだ。現代日本ではそれにさらに言語の軽視が加わっている。国会の本会議や委員会はいンターネットの生中継で見ることができが、そこでのやり取りたるや、言語が意味をはぎ取られた不条理劇の様

相を呈している。これを何時間も聞いていると精神に変調をきたしそうで聞いていられない。テレビのニュースではそれがうまく編集されて、対話が成立しているように見えることにまた驚愕する。『一九八四年』の為政者は、国民が深く思考できないように英語そのものの単純化を推進している。言語を使つてまともな対話ができることの意味を軽視してはならない。それを手放すことが何を意味するかに思いを致すならば。

『復活の日』には、文明史の教授が、聞く人もいなくなった世界に向けてラジオで講義をする場面がある。教授は「知識人、なかなか哲学者が、科学者と協力していたら」と嘆き、「これらの事を、世界の終末にあたって、はじめて率直に訴える気になった」ことを悔やむ。私たち人文科学の学徒は、この架空の教授の言葉に耳を貸さねばならない。本号に見られるような研究の営為を、小さな石を積み重ねるように続け、それを社会に見える形で発信していく義務があるのだ。

本号も前号と同じく、所長である私の貢献はきわめて小さい。本号が無事完成したのは、ひとえに姫野敦子編集委員長、事務職員の水塚尋子さん、執筆者の先生方、編集委員の先生方、査読者の先生方のおかげである。皆様、ありがとうございます。願わくは、この「あとがき」が消去されませんように。